

第4節 検出遺構

各面について概要

本調査区で確認できた遺構は、数少ない。1面においてSX01遺構、4面から明確な土坑2基を検出したのみである。

面の時期については、各面の下層から出土した遺物から、面の形成と下層の形成時期がそうかけはなれるものではないと考え、時期を判断している。

1面は、1面下層から寛永通寶（新寛永）が出土していることから、17世紀末から18世紀であると考えられる。

2面は、遺構は検出していない。時期は、16世紀の形成である。2面は、調査区の北半部のみで確認している。

3面は、遺構を検出していない。時期は15世紀代。

4面からは、土坑を検出している。3面と同じく15世紀代。

5面は、遺構は検出していないが、下層から縄文土器1点が出土している。

SX01（写真192～193・第108図・表39）

SX01は、第1面上面に土師質土器の皿が東西1m南北0.5mの範囲に集中して出土した箇所である。完形の土師質土器が多く、図示できる遺物は15点である。底径は5cm前後とそろっているが、器高は10cmと12cmのものがある。底面は、摩滅により不明瞭なものもあるが、判別できるものすべてに静止糸切り痕が残されている（第108図）。

遺構の性格は、境内周辺部に一括廃棄された土師質土器と考えられる。時期は、1面下層から寛永通寶1点が出土していることから、17世紀後半以降のものであろう。



写真192 彩古館北調査区 SX01遺構 遺物出土状況（西から）

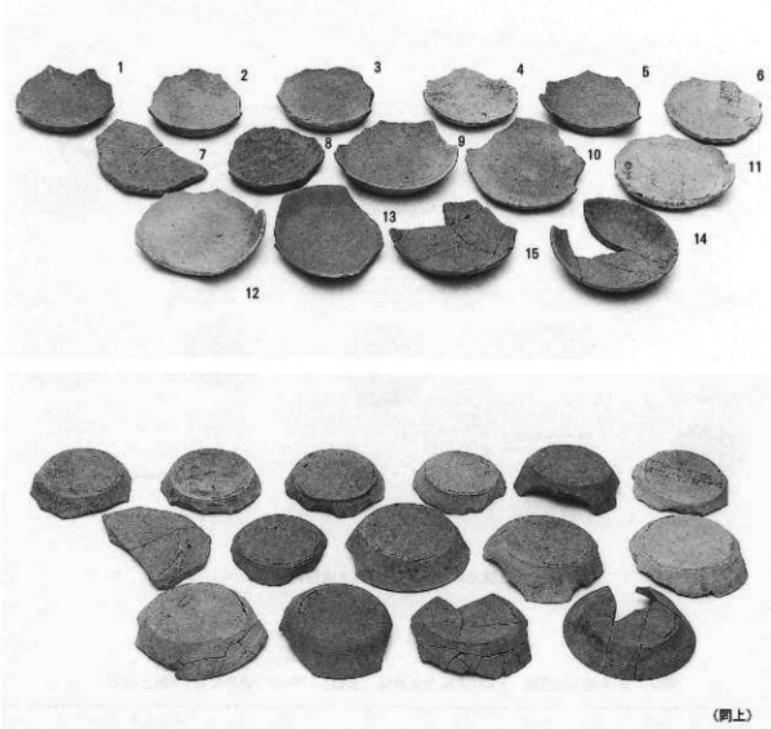


写真193 彩古館北調査区 SX01遺構 土師質土器（番号は第108図と対応）

SK01（第109図・写真194）

規模

SK01は、第4面から検出した遺構である。規模は、1.2m×1mの梢円形をしており、深さ10cmほどの浅い掘り込みで、底面は平滑。

覆土

一括の黒茶色土。炭粒をまばらに含む。底面はベース土が熱変して、硬化している。覆土中から土師質土器の壊・鉄釘が出土している。

性格

火を使用したと考えられるが、性格について

は不明である。

出土遺物（第111図・写真196・表40～41）

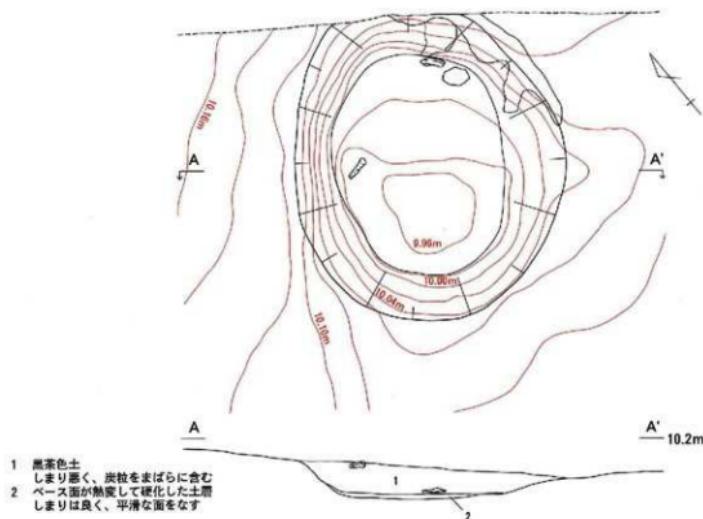
1は、土師質土器の壊である。底部を欠損している。

2は、長さ11cmの鉄釘ではほぼ完形である。釘周辺には土砂が付着している。

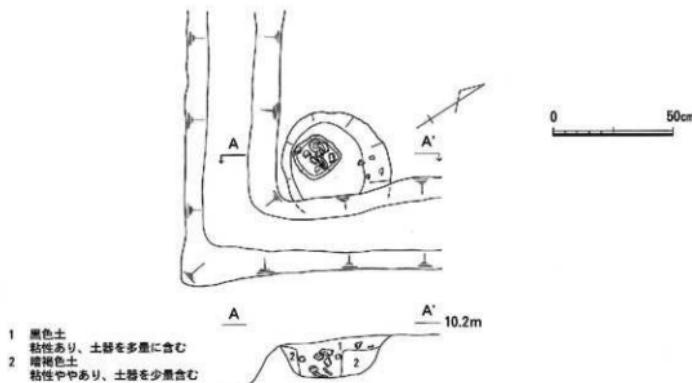
SK02（第110図・写真195）

規模

遺構の一部は、調査区周囲の排水用溝掘りのため完全に検出していない。確認できるのは、



第109図 彰古館北調査区 SK01遺構平面図・土層図 (S=1/20)



第110図 彰古館北調査区 SK02遺構平面図・土層図 (S=1/20)



写真194 彩古館北調査区 SK01遺構 検出状況（南西から）



写真195 彩古館北調査区 SK02遺構 検出状況（南西から）

検出面で35×50cmの不整揃円形をしており、6cmほど掘り下がった段階で、15×15cm方形のプランを確認した。深さは、10cmほどで壁は垂直に立つ。

覆土

黒色土一層のみである。しまりではなく、やや粘性をもつ。土器小破片・鉄器を含む。

性格

平面形が15cmの方形を呈していることから、15cm四方の角柱が立っていたと考えられる。本遺構は、柱の抜き取り跡と考えられる。柱根自体はなく、遺構の上部は、柱の抜き取り時に攪乱されたものと考えられる。時期は、遺構出土の遺物からは時期がはっきりとしないが、4面を形成している層が15世紀であると考えられることから、15世紀をそう下るものではないと考えられる。

出土遺物（第112図・写真197・表42～43）

1は、磨耗が激しいが、土師質土器柱状高台付壙の脚部である。

2は、長さ11cmの鉄釘である。先端部はやや欠損しているが、ほぼ完形である。

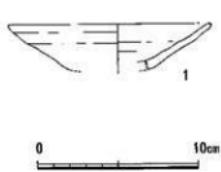
3は、長さ5cm以上の鉄釘である。体部には、赤色顔料が付着している。

第5節まとめ

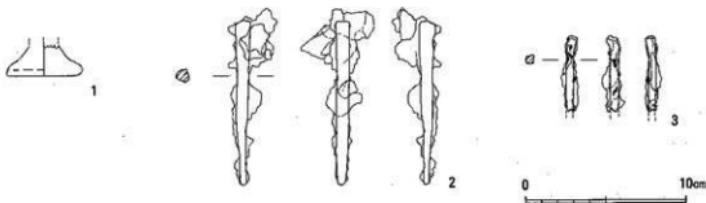
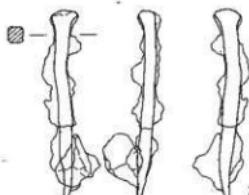
調査区が山裾に近すぎたため、境内として活用される空間からは、やや外れてしまい、境内北部での一般的な遺構の消長を把握できたとはいえない。

しかしながら、5面から縄文時代晩期の上器が出土しており、境内一円での人の活動の始まりが縄文晩期までさかのぼることが確認できた。

そのほか、合計で5面の生活面を確認した。面はすべて造成土ではなく、洪水などで堆積し



第111図 彩古館北調査区 SK01出土遺物実測図 (S=1/3)



第112図 彩古館北調査区 SK02出土遺物実測図 (S=1/3)

表40 彩古館北調査区 SK01遺構出土遺物（土器）観察表（番号は第111図と対応）

番号	遺構名	種類	器種	口径 (cm)	基高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調	胎土	調整／形態／文様	備考
1	SK01	土師質土器	Ⅲ	11.6	—	—	全體の90	灰白色	密	内外面：凹凸ナデ	磨耗が激しい

第8章

挙殿南の調査

第8章 拝殿南の調査

第1節 調査区の位置

本調査区は、境内拜殿の南側、平成12・13年度の八足門前調査区から南へ約50mに位置する。(第113図・写真198)

調査区の北約20mには現在の拜殿が、また東側の境内中央部には参拝用の石畳がある。

発掘調査面積は、当初50m²で調査を行っていたが調査区西側において基壇状の石列が確認されたことから、さらに20m²西側へ調査区を拡張し、発掘調査総面積は70m²となった。なお、拡張部分については、重要遺構が検出されたため、約80cm掘り下げた段階で遺構を保存し、埋め戻しを行なった。

調査面積は、安全勾配をとるため傾斜をつけて掘り進んだため、1層(上面検出時・以下略)67m²・2層67m²・3層65m²・4層32m²・5層30m²・6層27m²・7層24m²・8層20m²・9層20m²・10層7m²・11層6.8m²と徐々に狭小となった。



写真198 拝殿南調査区 近景

第2節 調査の目的

調査の目的としては以下の3点が挙げられる。

(1) 巨大本殿遺構に関連する遺構の有無を確認する。

本調査区は、平成12・13年度に八足門前調査区で確認した巨大本殿の中心線(宇豆柱と心御柱の中心を通る線)を延長した場所に設定しており、巨大本殿遺構に関わる遺構が確認される可能性がある。

(2) 境内中央部における境内景観の変遷を明らかにする

境内中央部における土層の堆積状況を明らかにして、各時期の境内景観を明らかにする。

(3) これまでの発掘調査等における成果との対応関係を明らかにする

本調査区南東側における昭和30年の防災工事地下貯水タンク設置工事や本調査区北側における昭和32・33年の拜殿建設(現在の拜殿地下)における調査成果との総合検討を行なう。

第3節 各層位について

(1) 1層

1層上面では調査区全体で黒色面を確認した。丸釘・溶解した銅片などが出土しており、昭和28年(1953)拜殿焼失時に伴う炭化物の集積であると考えられる。1層(黒色層)は調査区北東側で約5cmほどの堆積が見られるが、南西にいくにしたがって堆積は少なくなる。

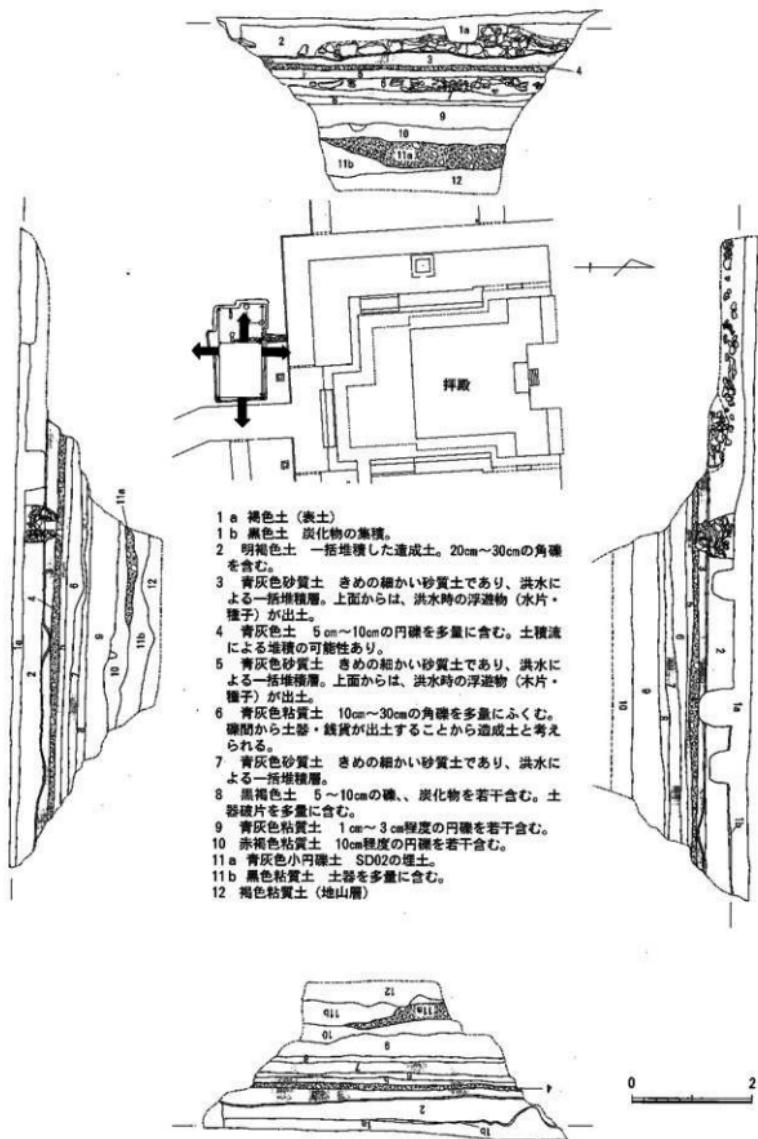
出土遺物 (第114~115図・写真199~200・表44~45)

1は、須恵器の壺蓋で天井部回転ヘラケズリがみられる。

2は、管状土錐である。

3・4は土師質土器の皿である。

5は、土師質土器の柱状高台付の壺である。第115図の1は寛永通寶である。



第113図 拝殿南調査区 土層図 (S=1/80)

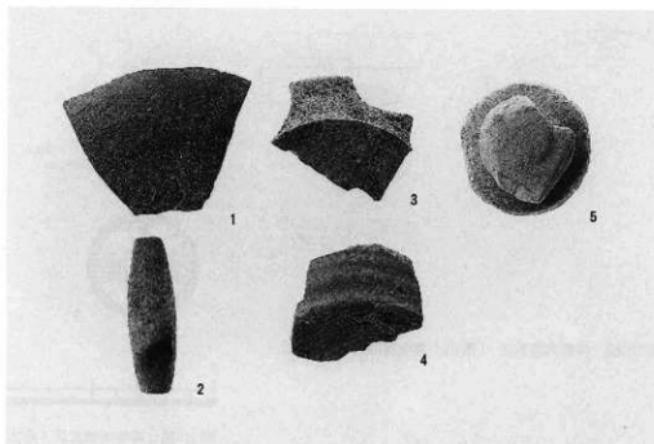


写真199 拝殿南調査区 1層出土遺物（番号は第114図と対応）

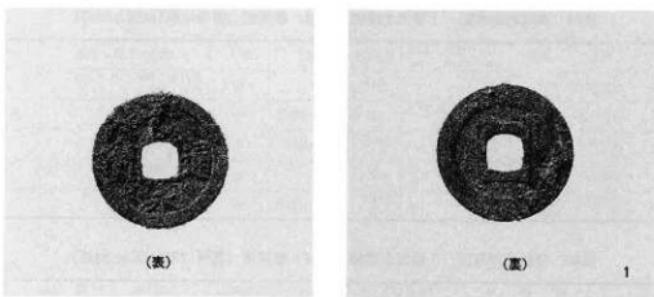


写真200 拝殿南調査区 1層出土銭貨（番号は第115図と対応）

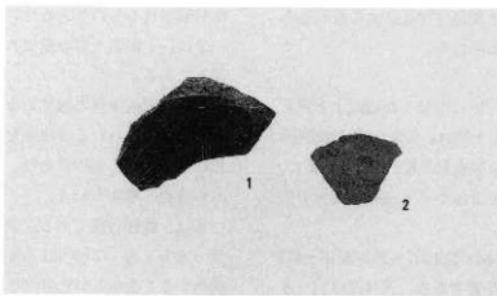
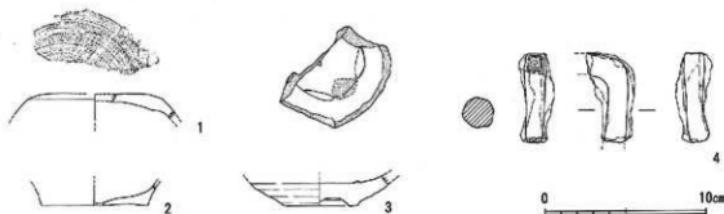


写真201 拝殿南調査区 2層出土遺物（番号は第116図と対応）



第116図 拝殿南調査区 2層出土遺物実測図 (S=1/3)

表46 拝殿南調査区 2層出土遺物（土器）観察表（番号は第116図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径(cm)	高さ(cm)	底径(cm)	残存率	色調	胎土	調査／形造／文様		備考
										内外面	天井部：回転ヘラケズリのち平行文	
1	2	須恵器	壺蓋	—	—	—	小片	褐灰色	密	内外面：回転ナデ	天井部：回転ヘラケズリのち平行文	—
2	2	土師質土器	皿	—	—	6.4	小片	にぼい橙色	密	底部：回転余切り 内外面：回転ナデ	底部：回転余切り 内外面：回転ナデ	—
3	2	陶器	皿	—	—	4.8	全体の30	胎土：褐色 釉薬：灰色	密	高台：削りだし、泡巾高台 内面：施釉、残存部にニヶ所の胎 土目積み痕、一ヶ所に砂目積み痕 外表面：露胎、回転ヘラケズリ	高台：削りだし、泡巾高台 内面：施釉、残存部にニヶ所の胎 土目積み痕、一ヶ所に砂目積み痕 外表面：露胎、回転ヘラケズリ	17世紀前半・ 紀前葉

表47 拝殿南調査区 2層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第116図と対応）

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
4	2	鍔	背部長4.5 爪部長1.7	背部幅1.2	1.2	31.31	30	背部断面方形 鋒化が著しい

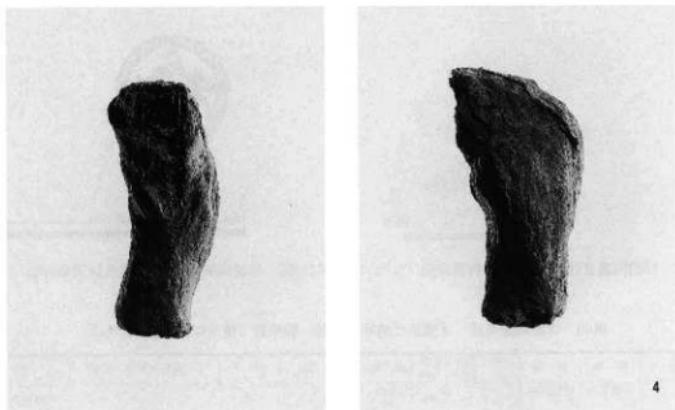


写真202 拝殿南調査区 2層出土鉄製品（番号は第116図と対応）

表50 拝殿南調査区 4層出土遺物（銭貨）観察表（番号は第119図と対応）

(単位 mm)

銭名	初鋳年	銭径(A)	銭径(B)	内徑(C)	外徑(D)	銭厚	量目(g)
元符通寶	1096	23.74	28.80	18.75	18.90	1.10~1.15	3.05

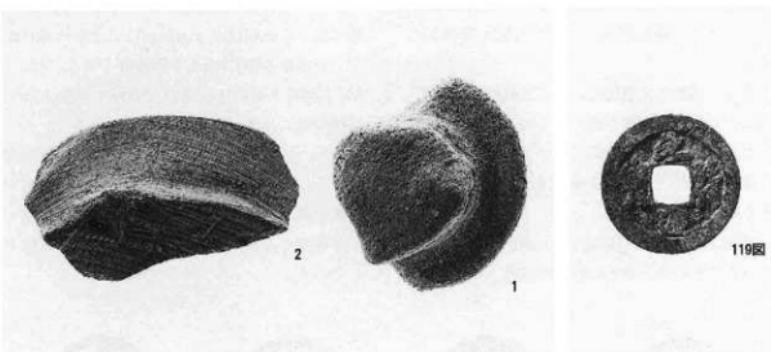


写真204 拝殿南調査区 4層出土遺物（番号は第118~119図と対応）

(5) 5層

5層は、青灰色砂質土で洪水により短期間に形成された堆積層と考えられる。5層上面においても3層同様に洪水後の浮遊物と考えられる木片や種子が検出面全体で確認できた。

洪水の時期については、5層中から青花皿C類1点（写真219-17）が出土しており、16世

紀前半代の年代が与えられる。また、2層が寬文度の造成土であると考えると、16世紀前半代から17世紀代に発生した洪水により、3、4、5層が短期間に形成されたと考えられる。

出土遺物（第120図・写真205・表51）

1は、鉄製の釘である。長さは5.4cmである。

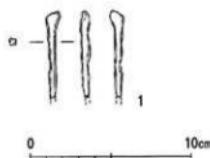
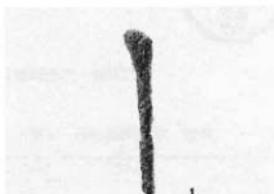
第120図 拝殿南調査区
5層出土遺物実測図 (S=1/3)写真205 拝殿南調査区 5層出土遺物
(番号は第120図と対応)

表51 拝殿南調査区 5層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第120図と対応）

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
1	5	釘	5.4	0.4×0.9	0.4×0.5	3.82	90	打面：長方形／頭部：端部圧延、折り曲げ、側面：沿わす

(6) 6層

6層中には30cmから10cm大の角礫が多量に包含していた。礫間には完形の土師質土器（碗）や鉄貨が巻き込まれていることから人為的な造成土である可能性がある。(第131図・写真209~210)

礫は、調査区北西部において比較的集中して出土しており、南東方向にいくにしたがって礫は少なくなる。6層上面において掘り込みなどが確認できないことから礫自体が遺構とは考えにくい。

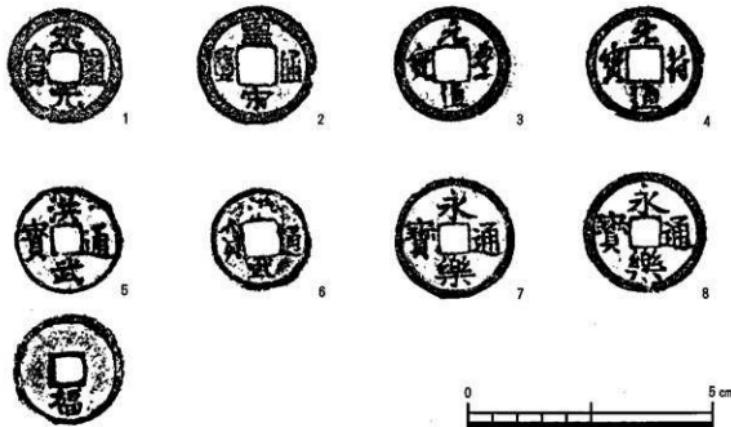
年代は、層中から模鋳銭の洪武通寶が出土していることから、6層の形成時期は、中世末と

考えられる。

出土遺物(第121~122図・写真206~208・表52~53)

1~14は、土師質土器の壺・皿類である。底径では、7cm前後と5cm前後に分けられる。また、14は器高が1.8cmと小形の皿である。15、16は土師質土器の柱状高台付の壺である。15の壺部内面には強いナデ痕跡がみられる。

また、錢貨が9点出土している。このうち判読できるものは、北宋錢の宋通元寶・皇宋通寶・元豐通寶・元符通寶。また明錢は、洪武通寶・永樂通寶である。洪武通寶の模鋳銭が1点出土している。

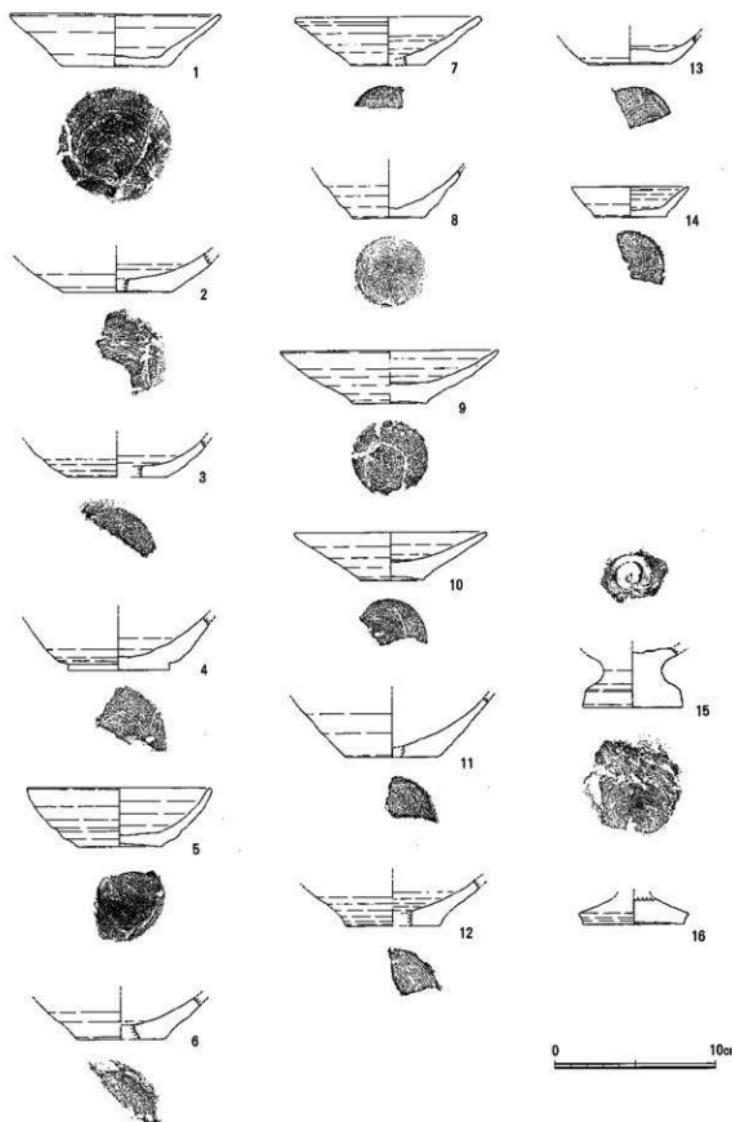


第121図 拝殿南調査区 6層出土銭貨拓影図 (S=1/1)

表52 拝殿南調査区 6層出土遺物(銭貨)観察表(番号は第121図と対応)

(単位 mm)

番号	銭名	初鑄年	銭徑(A)	銭徑(B)	内徑(C)	内徑(D)	銭厚	重目(g)
1	宋通元寶	960	23.90	24.15	18.15	18.65	0.90~1.00	2.17
2	皇宋通寶	1038	24.50	24.65	18.80	19.20	1.04~1.05	2.10
3	元豐通寶	1078	24.00	24.00	19.00	18.85	1.40	3.61
4	元符通寶	1098	24.25	24.20	19.70	19.90	1.20~1.40	2.87
5	洪武通寶	1368	22.53	22.44	20.15	20.20	1.10~1.70	2.96
6	洪武通寶	模鋳錢(中世末期~近世初期)	20.91	20.90	17.91	17.45	0.80~1.00	1.42
7	永樂通寶	1408	24.90	24.90	21.25	21.21	1.15~1.35	2.79
8	永樂通寶	1408	25.45	25.20	21.00	21.45	1.20~1.30	2.39



第122図 拝殿南調査区 6層出土遺物実測図 (S=1/3)

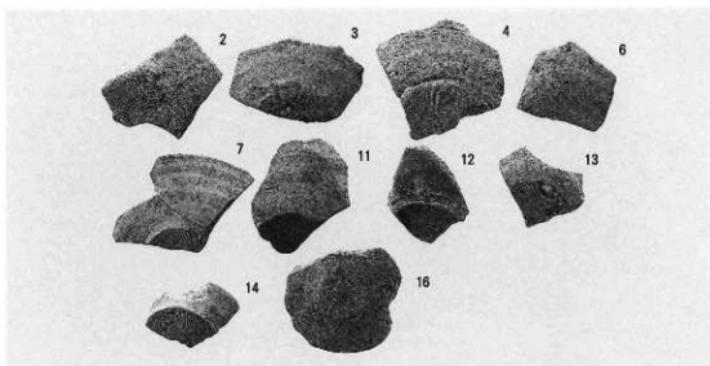


写真207 拝殿南調査区 6層出土土師質土器(2) (番号は第122図と対応)

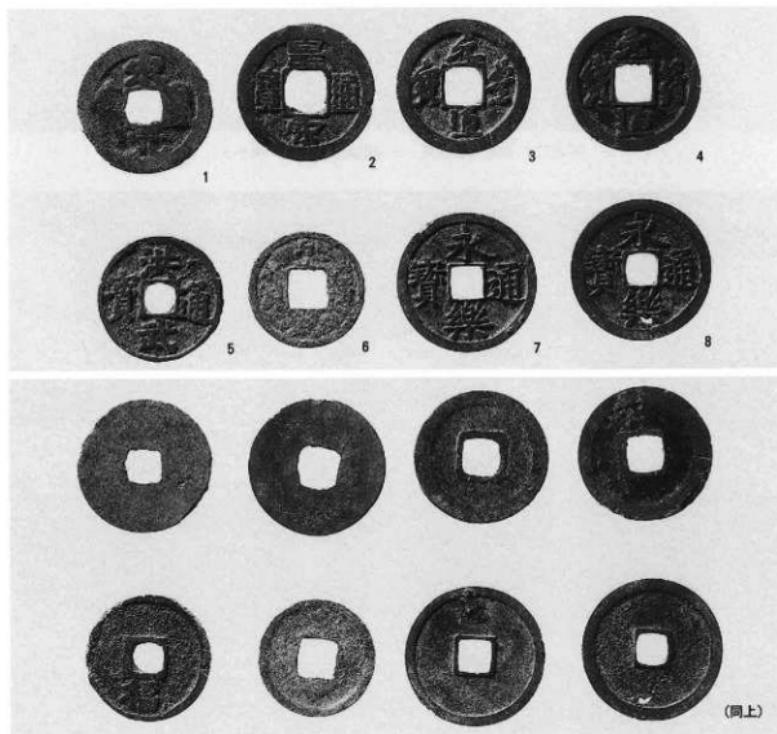


写真208 拝殿南調査区 6層出土銭貨 (番号は第121図と対応)



写真209 拝殿南調査区 6層中礎出土状況（南から）



写真210 拝殿南調査区 6層中礎半截状況（西から）

(7) 7層

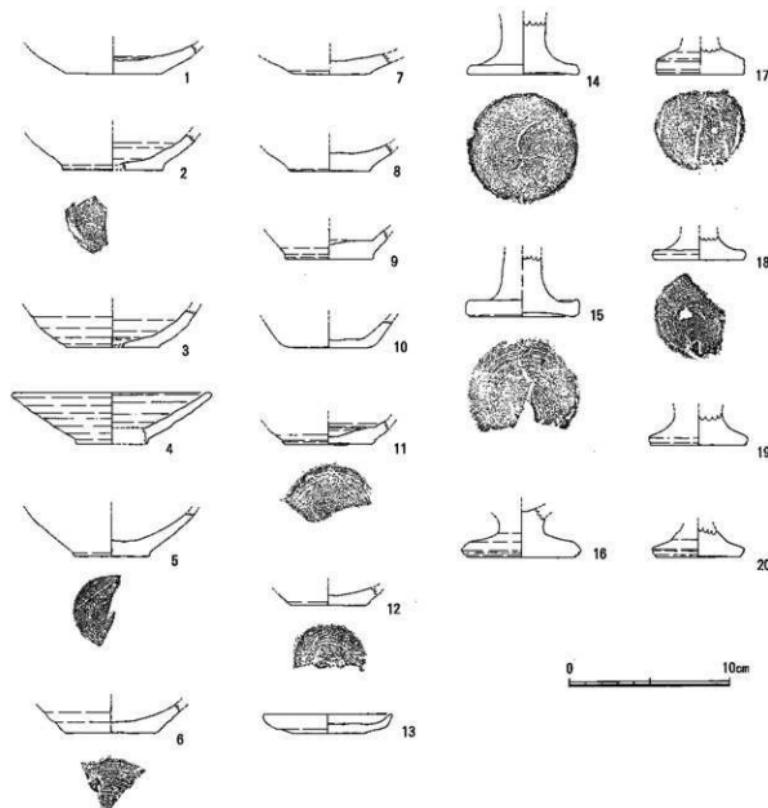
7層は青灰色砂質土である。3層、5層と同様にしまりなく、洪水による堆積層と考えられる。

出土遺物（第123図・写真211・表54）

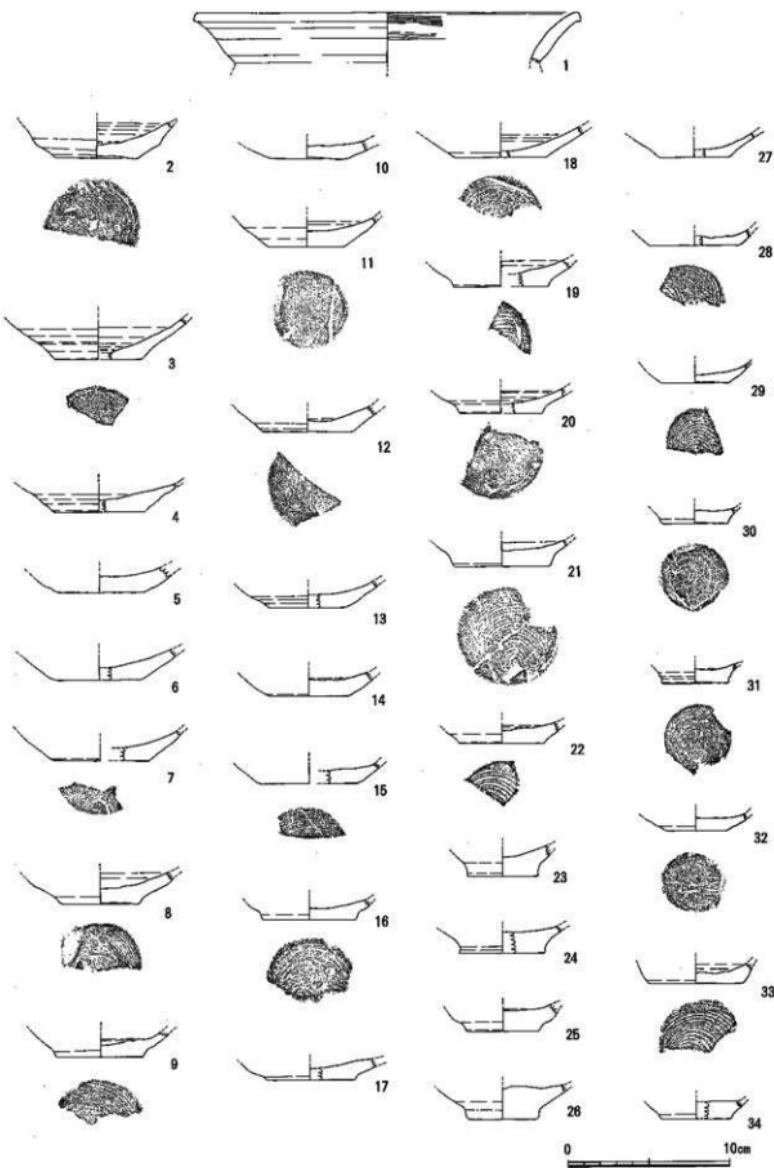
1~13は、土師質土器の皿である。13は、器高が1.1cmと他の土師質土器に比べ、極端に低

い。14~20は、土師質土器の柱状高台付の壺である。底径から7cm前後と5cm前後に分けられる。

時期は、出土遺物からは不明である。



第123図 拝殿南調査区 7層出土遺物実測図 (S=1/3)



第124図 拝殿南調査区 8層出土遺物実測図(1) (S=1/3)

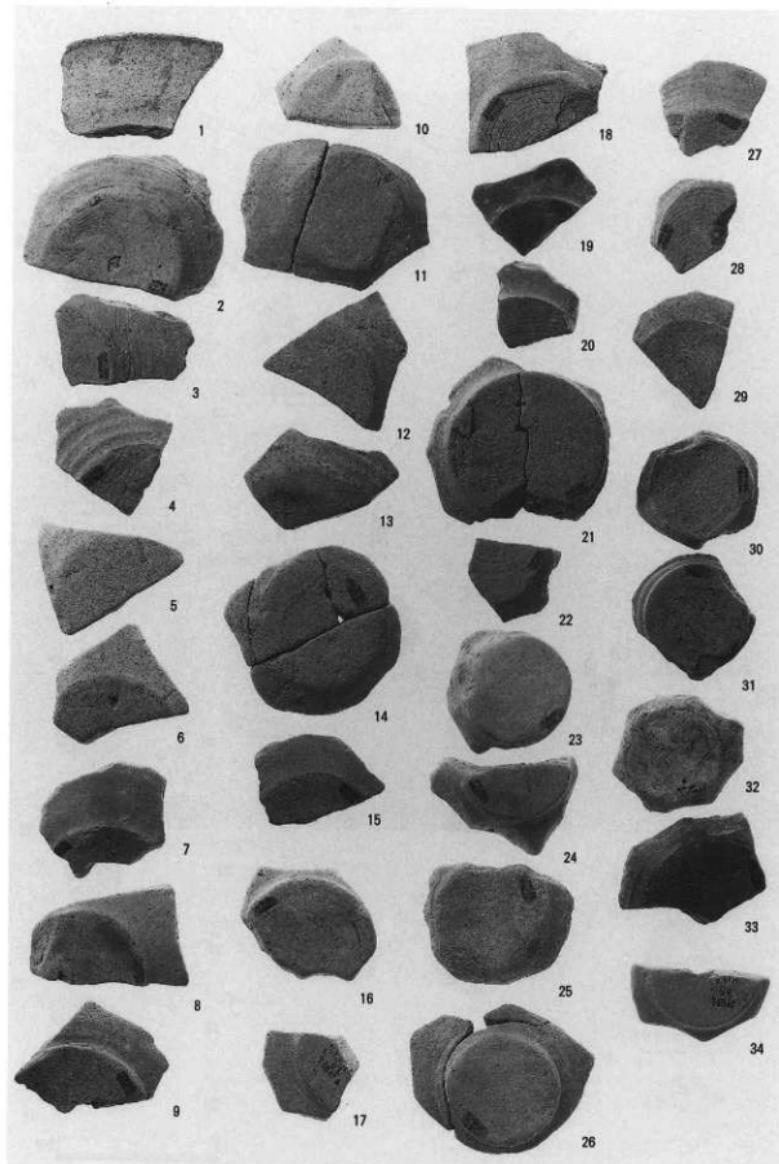
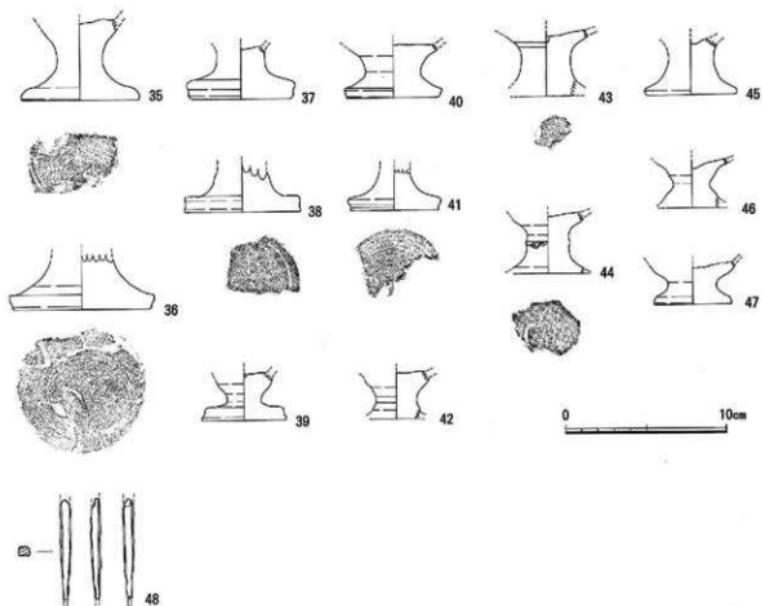


写真212 拝殿南調査区 8層出土土師質土器(1) (番号は第124図と対応)



第125図 拝殿南調査区 8層出土遺物実測図(2) ($S=1/3$)

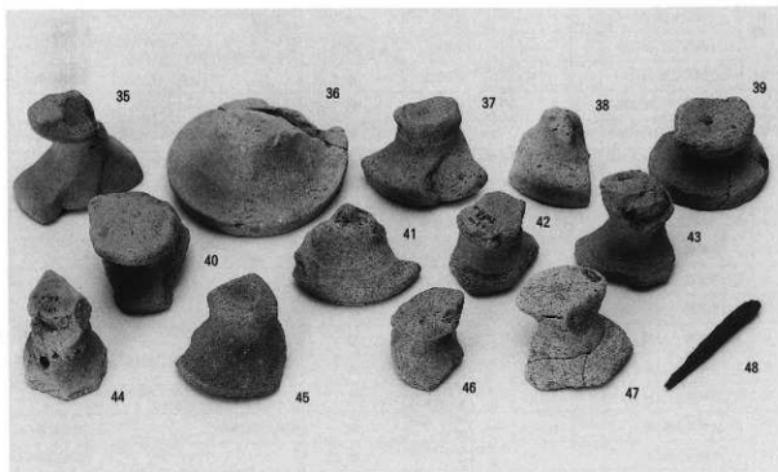


写真213 拝殿南調査区 8層出土土師質土器(2)・鉄製品 (番号は第125図と対応)

(9) 9層

9層上面では、ピット7基を検出しており、一定期間境内遺構面として機能した面である。

出土遺物（第126図・写真214～216・表58～59）

1、2は、単純口線の上師器壺である。いずれも体部内面にヘラケズリが施されている。（草田6期？）

3～7は、低脚壺の脚部である。

8は、土師質土器の柱状高台付壺である。壺部内面に穿孔がみられる。

9は、土師器高壺の脚部である。

10・11は、飛田恵美子氏の分類8類（棒状脚、台脚は、その名残をとどめる程度）に分類されよう。時期は10・11とも6世紀後半代の年代が与えられる。

12～14は、須恵器のはんである。3点とも底径6cm程度であるが、2・3には、底面回転糸

切り痕が明確に残るが、1は摩滅したのであるか、回転糸切り痕はみられない。いずれも、体部のみ残存しており、頸部は、不明瞭である。

年代は、底部を糸切りのまま放置し、底面が凹面になるなど、出雲国庁編年の第4形式に該当すると考えられる。8世紀後葉以降の年代が与えられる。

15は、高台壺の須恵器の壺、16は、高台のない須恵器の壺である。15・16とも底部は回転糸切りであり、高広編年のIVA期（8Cの中～後）と考えられる。

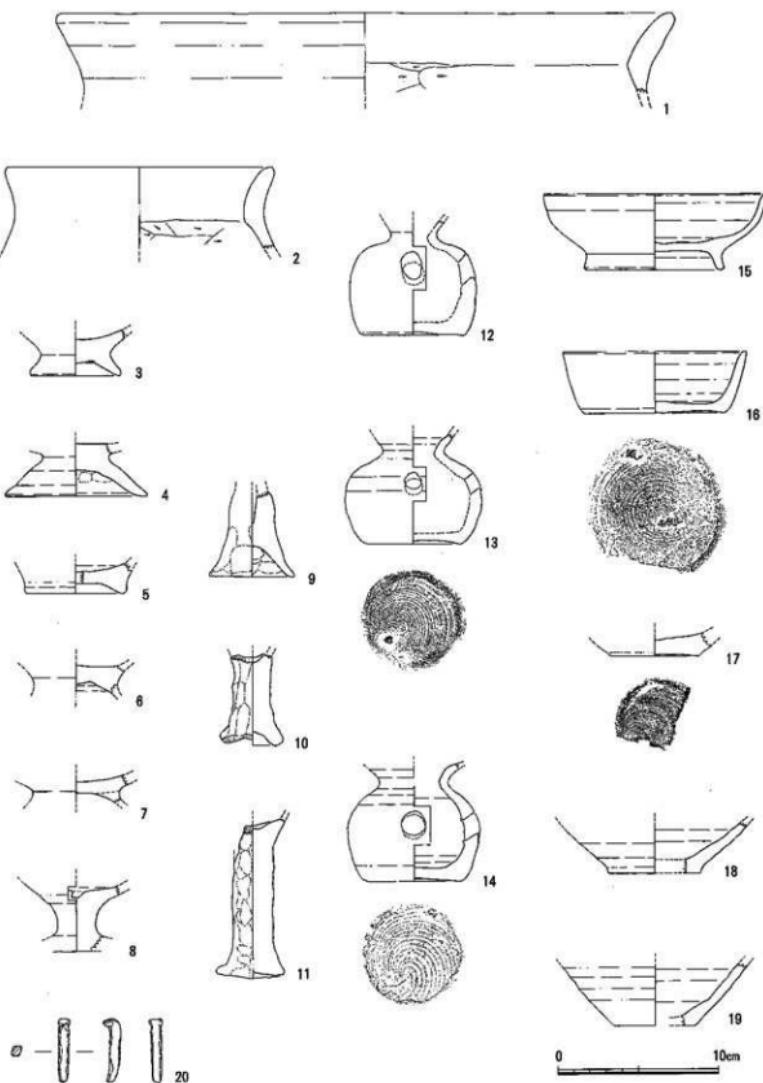
17～19は、土師質土器での、17は皿、18・19は、壺である。

20は、長さ4cmほどの角釘である。

9層の形成時期は、土師質土器の出土から中世前半代と考えられる。

表58 拝殿南調査区 9層出土遺物（土器）観察表（番号は第126図と対応）

番号	層位	種類	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	保存率	色調	胎土	調査/形態/文様	備考
1	9	土師器	壺	38.4	—	—	口縁部 小片	にぼい黄褐色	密	単純口線：短く上方に外傾 口縁端部： 面をもたない、口縁部内外曲：横ナデ 内面：横位の「カケズリ」	—
2	9	土師器	壺	16.4	—	—	口縁部 小片	にぼい黄褐色	密	単純口線：短く上方に外傾 口縁端部： 面をもたない、口縁部内外曲：横ナデ 内面：横位の「カケズリ」	—
3	9	土師質土器	低脚壺	—	—	5.6	全体の 40	にぼい黄褐色	密	脚部：环底部を回転糸切りしてから脚貼 付け、②転ナデ？	磨耗が著しい
4	9	土師器	低脚壺	—	—	8.8	—	黄褐色	密、3mm程度の砂 粒を多量に含む	脚部内面：指ナデエ 环部内外面、脚部 外面、及び脚部内面の一部に赤影が残る	磨耗が著しい
5	9	土師質土器	低脚壺	—	—	6.1	全体の 30	淡黄褐色	密	—	磨耗が著しい
6	9	土師器	低脚壺	—	—	—	全体の 20	褐色	密	—	磨耗が著しい
7	9	土師器	低脚壺？	—	—	—	小片	にぼい黄褐色	密	—	磨耗が著しい
8	9	土師質土器	柱状高台 付壺	—	—	6.5	全体の 65	にぼい黄褐色	密	环部内面：中央に穿孔 内面：回転ナデ？	—
9	9	土師器	高壺	—	—	5.2	脚部の 80	にぼい黄褐色	密、1mm程度の砂 粒を多量に含む	手づくね 脚部外面：縦位に指ナデ 脚部内面：横位に指ナデ	—
10	9	土師器	製塙土器	—	—	3.9	—	淡黄褐色	密	手づくね 脚部外面：縦位に指ナデ 脚部内面：横位に指ナデ	—
11	9	土師器	製塙土器	—	—	4.1	—	黄褐色一部 黒色	密、1mm程度の砂 粒を多量に含む	手づくね 脚部外面：縦位に指ナデ 脚部内面：横位に指ナデ	—
12	9	須恵器	壺	—	—	6.6	全体の 90	明灰褐色	密、1mm～3mmの 砂粒含む	手づくね 脚部外面：縦位に指ナデ 脚部内面：横位に指ナデ	—
13	9	須恵器	壺	—	—	6.2	全体の 90	灰褐色	密	底部：回転糸切り 外表面：回転ナデ	—
14	9	須恵器	壺	—	—	6.2	全体の 60	茶褐色	密	底部：回転糸切り 外表面：回転ナデ	牛糞けの直裏 器
15	9	須恵器	高台付壺	13.8	4.7	8.5	全体の 20	灰褐色	密	高台：貼付け 高台輪部：面をもつ 内 外側：回転ナデ	—
16	9	須恵器	壺	11.4	3.8	8.6	全体の 60	灰褐色 附付近黒色	密	底部：回転糸切り 内面：回転ナデ、一 定方向ナデ 外面：回転ナデ	—
17	9	土師質土器	皿	—	—	5.4	小片	にぼい黄褐色	密	底部：回転糸切り	磨耗が著しい
18	9	土師質土器	皿	—	—	5.8	全体の 20	にぼい黄褐色	密	底部：回転糸切り 内表面：横ナデ 外面：赤影	磨耗が著しい
19	9	土師質土器	皿	—	—	5.2	小片	にぼい黄褐色	密	底部：回転糸切り 内表面：横ナデ 外面：赤影	—



第126図 拝殿南調査区 9層出土遺物実測図 (S=1/3)

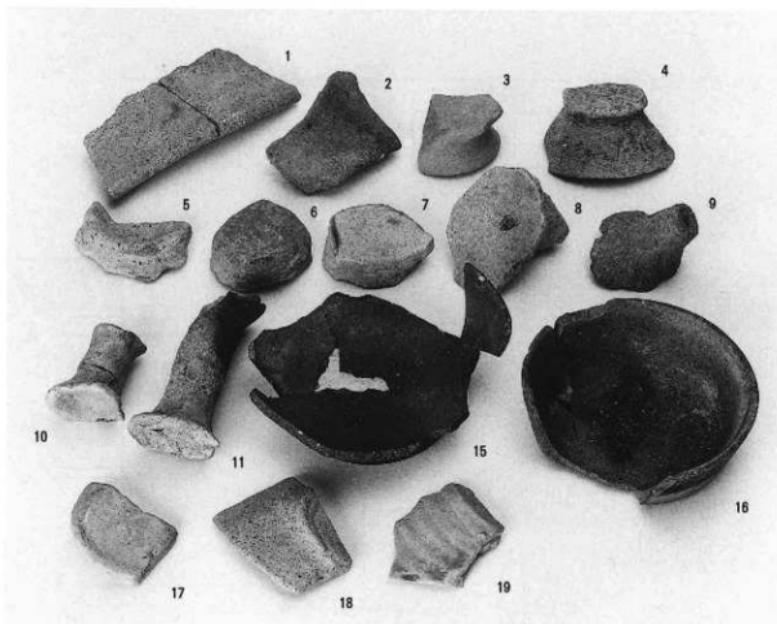


写真214 拝殿南調査区 9層出土遺物（番号は第126図と対応）

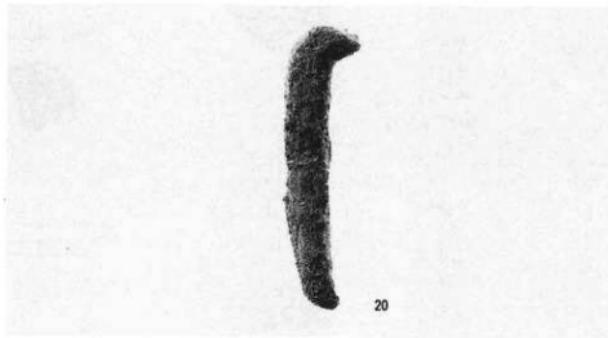
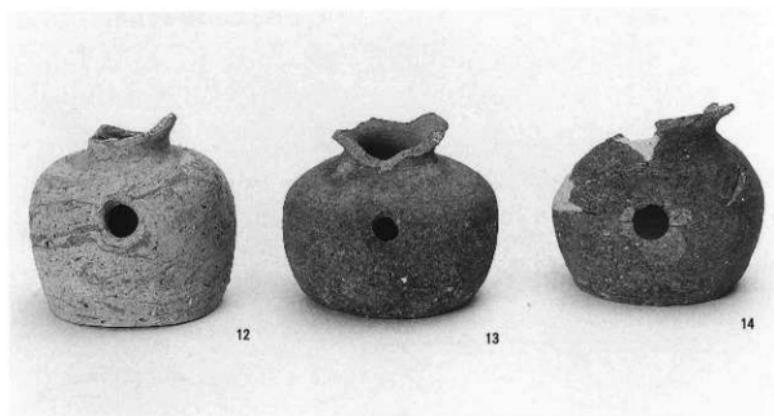


写真215 拝殿南調査区 9層出土鉄製品（番号は第126図と対応）

表59 拝殿南調査区 9層出土遺物（鉄製品）観察表（番号は第126図と対応）

番号	層位	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	残存率(%)	備考
20	9	針	3.9	頭部幅 0.6×0.7	0.5×0.5	2.75	90	打面：方形 頭部形態：端部圧延、折り曲げ、頭部との境にくびれなし



(同上)

写真216 拝殿南調査区 9層出土須恵器（壺）（番号は第126図と対応）

00 10層

10層上面においては、炭化物が面的に広がりを持つことから、一定期間境内遺構面として機能したと考えられる。

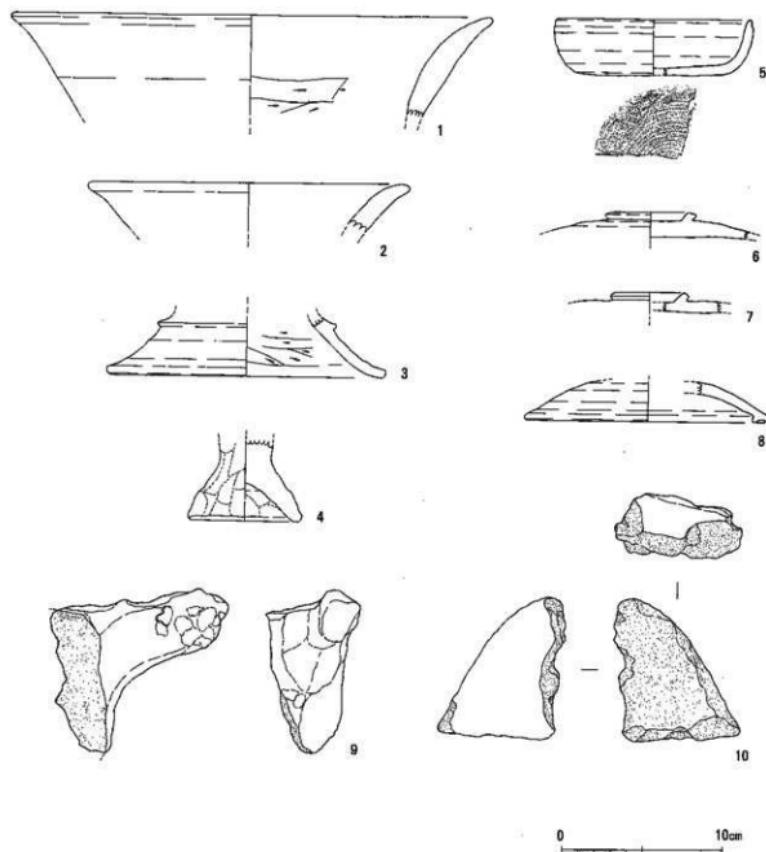
上面で遺構は検出されなかった。

出土遺物（第127図・写真217・表60～61）

1・2は、単純口縁の土師器壺である。

3は、土師器の鼓形器台の下台部分である。
草田6期に該当する。

4は、土師器高壺の脚部である。



第127図 拝殿南調査区 10層出土遺物実測図 (S=1/3)

5は、須恵器の坏である。底部回転糸切りであり、高広編年ⅣA期（8中～後）であろう。

6～8は、須恵器の坏蓋である。6・7は、輪状つまみであり、また、8は、口縁部にかえりがあり、高広編年Ⅲ期（7中～8前）に該当しよう。

9・10は、土製支脚である。

10層の形成時期は、出土遺物が須恵器・土師器が出土するものの、9層中にまで出土している土師質土器・陶磁器が1点も出土しないことから8世紀前半～11世紀頃に堆積したと考えられる。

表60 拝殿南調査区 10層出土遺物（土器）観察表（番号は第127図と対応）

番号	層位	種類	器種	残存率	色調	胎土	調査／形態／文様	備考
1	10	土師器	壺	口縁部小片 にぶい黄褐色	密	口縁部外面：横へヶ、一部に赤彩が残る 口縁部内面：横へヶ、横のへう削り		被熱により黒色を呈している
2	10	土師器	壺	口縁部小片 にぶい黄褐色	密	内外面：横ナデ		—
3	10	土師器	鋳型器台	小片	明赤褐色	密	内外面：へう削り、横ナデ 外底：横ナデ	—
4	10	土師器	高環	脚部の70 にぶい黄褐色	粗 砂粒を多く含む		手づくね 脚部内面：ナデ 脚部外面：上半幅方向斜に強くナデつけ、下平：横ナデ、指オサエ	—
5	10	須恵器	坏身	全体の30 褐灰色	密		口縫部：内窪して立ち上がり、端部をわずかに外側に打ち出る 底盤：回転系切り 内面：回転ナデ、一定方向ナデ、不定方向ナデ 外底：強い横ナデによる凹凸	—
6	10	須恵器	坏蓋	全体の30 褐灰色	密		輪状つまみ：面をもつ、貼付け、回転ナデ 大井型：回転へう削り、ナデ 内底：ナデ	—
7	10	須恵器	坏蓋	小片 灰色	密		輪状つまみ：面をもたない、貼付け、回転ナデ 大井型：回転へう削り、ナデ 内底：回転ナデ、一定方向ナデ	—
8	10	須恵器	坏蓋	口縁部小片 褐灰色	密		口縁部：端部内側の突帯内傾、回転ナデ 内底：回転ナデ、ナデ 外底：回転へう削り、回転ナデ	—

表61 拝殿南調査区 10層出土遺物（土製品）観察表（番号は第127図と対応）

番号	層位	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	胎土	色調	備考
9	10	土製支脚	—	—	—	密	浅青褐色	—
10	10	土製支脚	—	—	—	やや粗くぼろぼろ欠落する	浅青褐色	—

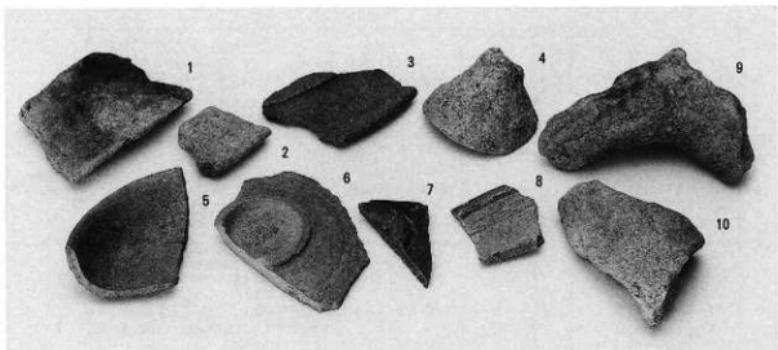
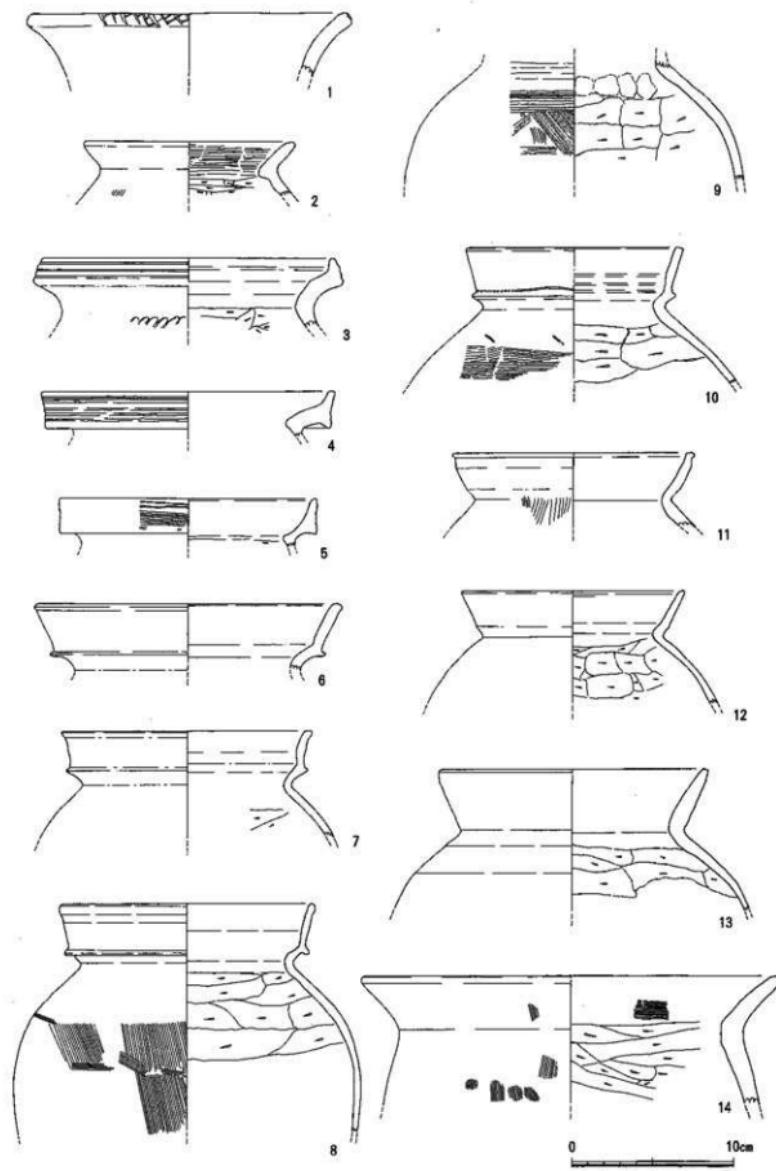
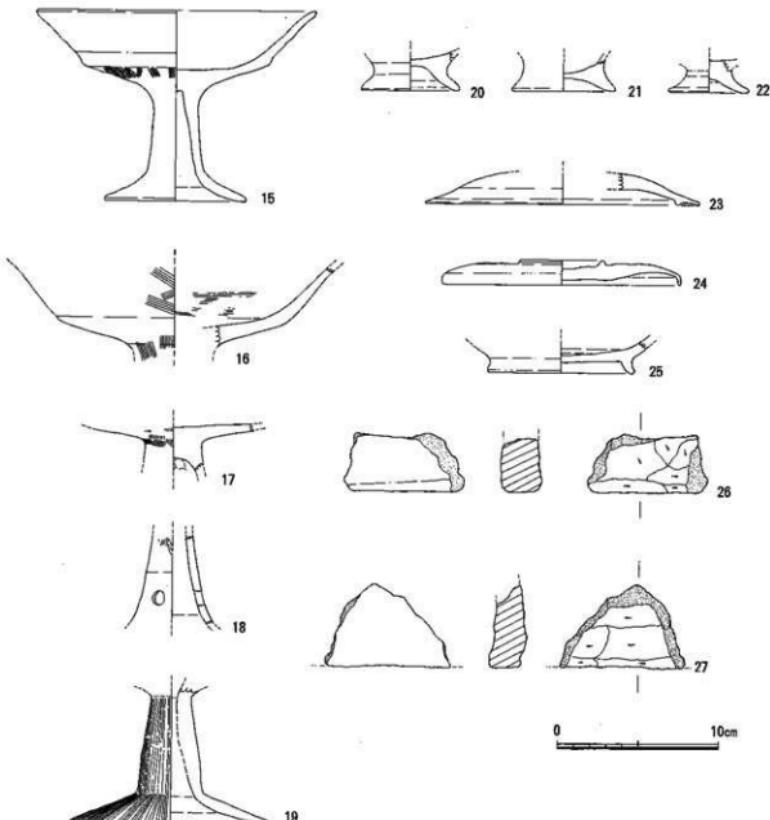


写真217 拝殿南調査区 10層出土遺物（番号は第127図と対応）



第128図 拝殿南調査区 11層出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第129図 拝殿南調査区 11層出土遺物実測図(2) (S=1/3)

(12) 12層

12層上面において造構は確認されなかった。また、12層上面検出後、さらに1m程度掘り下げているが、遺物は全く出土しないことから、遺物を包含する層は、11層中までと考えられる。

(13) 出土遺物について

宝治度本殿造構と同一の面と考えられる8層上面であるが、調査面積約20㎡であるが、本調

査区内の層位においては、最大の出土量である。(第130図)出土遺物としては、土師質上器が最も割合が大きい。なかでも柱状高台付壺は、全出土量の50パーセント以上の46点である。宝治度本殿造構周辺においても柱状高台付壺が集中して出土しており、中世段階での最も活発な活動をした造構面であろう。

土師質土器は、8層まで比較的多く出土しているが、9層から須恵器・土師器が増加していく

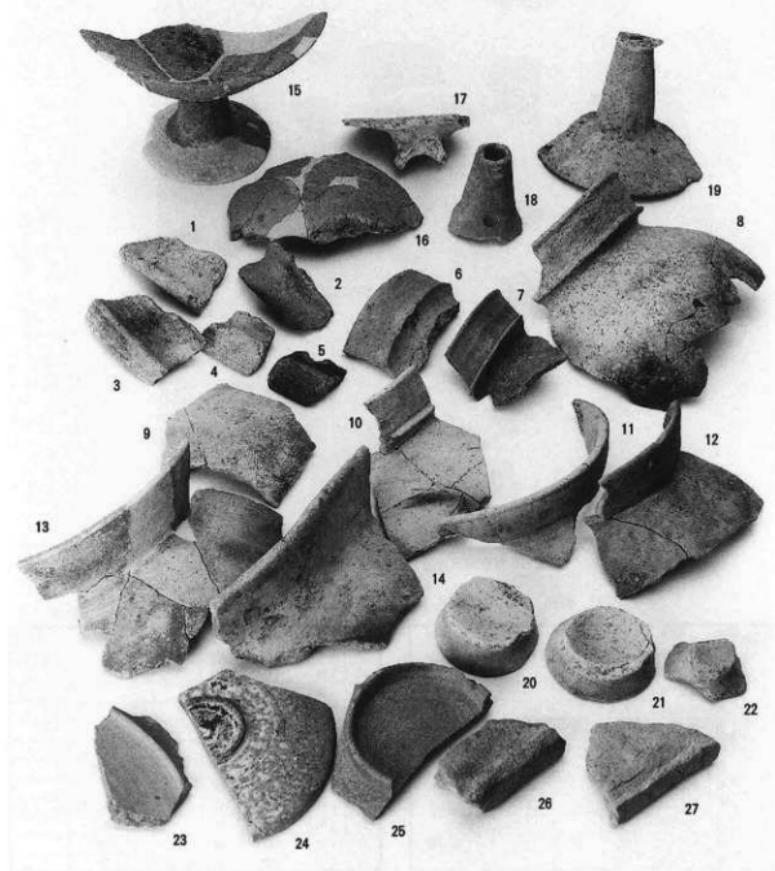


写真218 拝殿南調査区 11層出土遺物（番号は第128～129図と対応）

る。土師器は、9層から急激に増加し、11層で全出土量の50パーセント以上が出土する傾向が窺え、平成11年度調査時の古墳時代前期造構面

出土の土師器とあわせて考えても、境内中央部には、古墳時代前期の人々の活発な活動があったことが窺える。

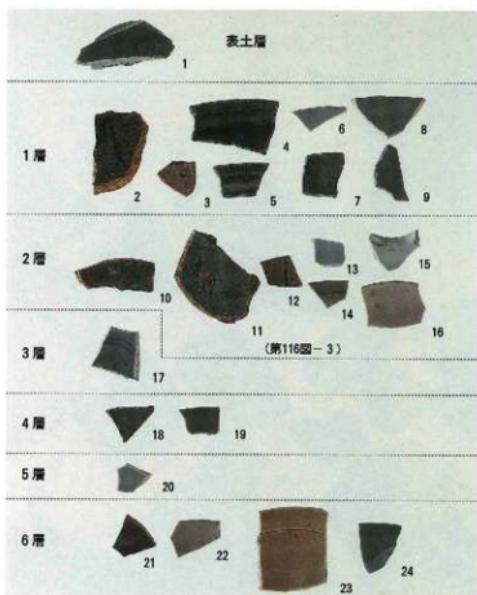


写真219 拝殿南調査区 陶磁器類 (番号は表66と対応)

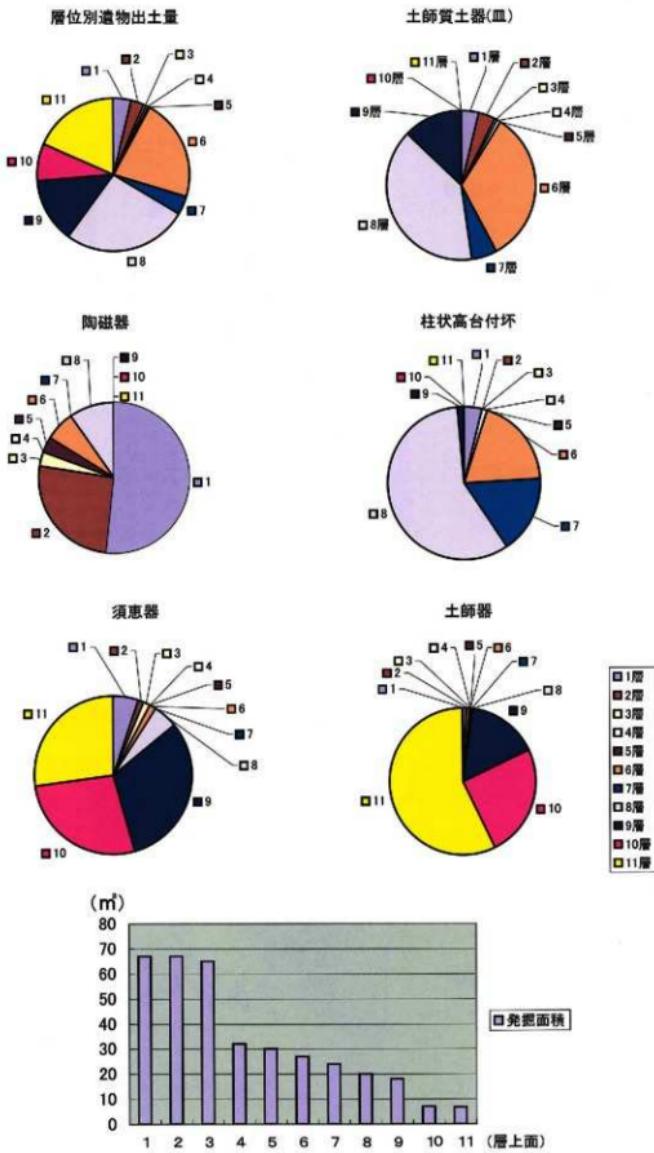
表66 拝殿南調査区 陶磁器 (番号は写真219と対応)

番号	層位	種類	基盤	時期	特徴	回版
1	表土	青磁	皿	13前半	龍泉窯 青白文:篆	
2	1層	把柄系陶器	皿	17前半	铁绘	
3	1層	把柄系陶器	皿	17		
4	1層	把柄系陶器	火入			
5	1層	把柄系陶器	火入			
6	1層	白磁	皿	15~16	E-1類	
7	1層	磁器				
8	1層	把柄系陶器	皿		陶胎染付	
9	1層	把柄系陶器	皿		古伊万里	
10	2層	把柄系陶器	皿			
11	2層	把柄系陶器	皿	17		第116図-3
12	2層	把柄系陶器	皿			

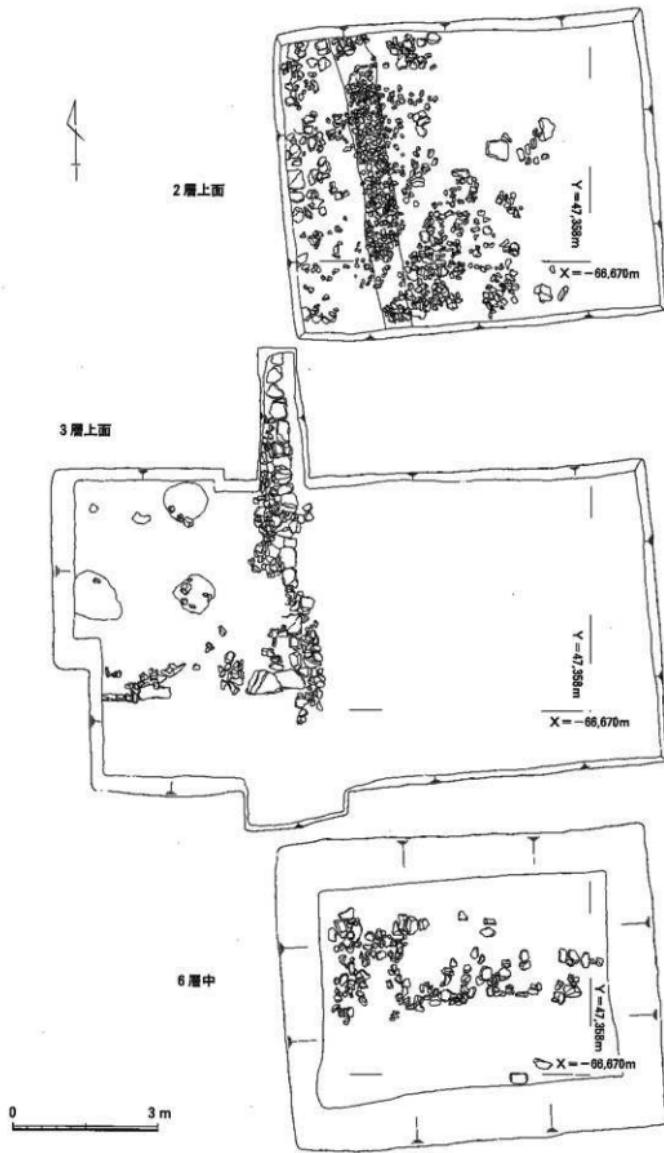
番号	層位	種類	基盤	時期	特徴	回版
13	2層	青花	皿			
14	2層	青花	皿			
15	2層	肥前系磁器	皿			
16	2層	肥前系磁器	皿			
17	5層	青花	皿		C類	
18	6層	肥前系磁器	皿			
19	6層	青磁	皿		B-1類	
20	7層	白磁	皿			
21	8層	陶器	皿		褐釉・中国製	
22	8層	白磁	皿		II類	
23	8層	白磁	碗		V類	
24	8層	青磁	皿	13前半	I類	

表67 拝殿南調査区 土師質土器・陶磁器集計表

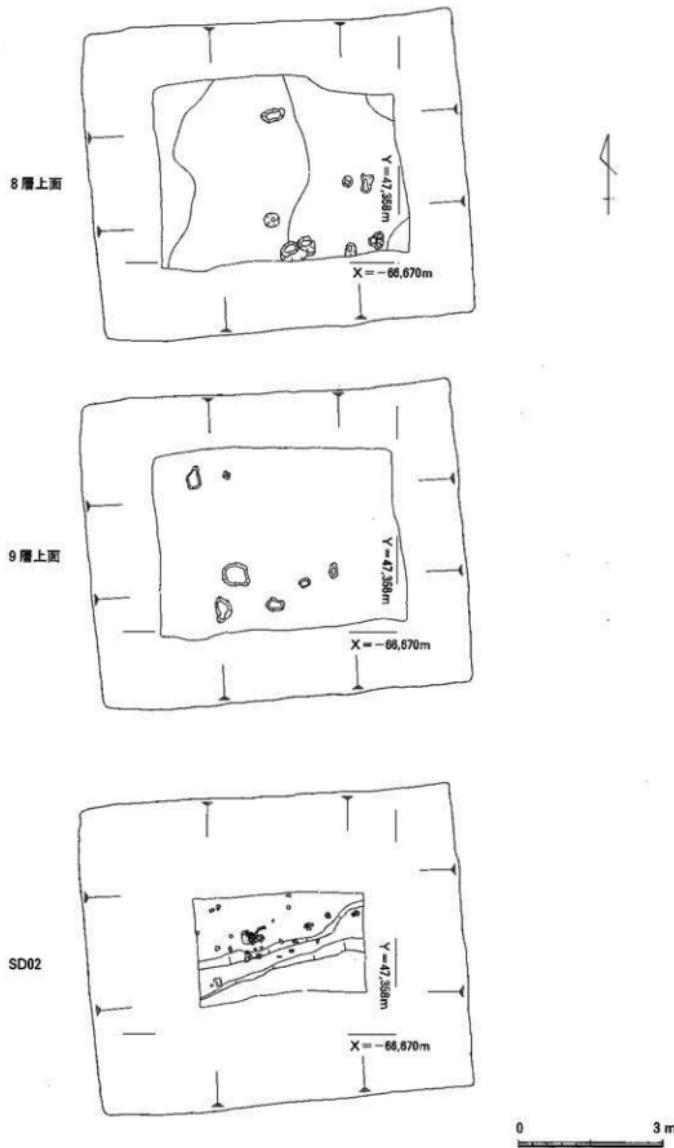
種別	土師質土器			白 磁			青 磁			青 花			海輪	肥前系 磁器	肥前系 陶器			
	器種	皿		II類	V類	E-1	中国系	B-1	1類	龍泉窯系	C群	その他						
		数	件															
表土										1				2				
1層	84	3				1								6	3			
2層	84												1	2	3			
3層	10																	
4層	17	1																
5層	1											1						
6層	743	15							1		1							
7層	122	15						1										
8層	883	46	1	1						1				1				
9層	283	1																



第130図 拝殿南調査区 出土量グラフ



第131図 拝殿南調査区 遺構面平面図(1) (S=1/100)



第132図 拝殿南調査区 造構面平面図(2) (S=1/100)

第4節 検出構構

(1) SD01 (第133図・写真220～223)

2層上面で検出した。

本調査区の西側において南北流れる溝である。検出した溝は南北の6m分である。

溝は、現在でも機能しており、溝では北から南への流水がみられる。

規模は、上面幅約60cm、深さ50cmを測り、溝底面には、両側面に10cm～20cm大の扁平な石が積まれ、その上に30cm～50cm大の礫が溝中央に蓋石のように積まれていた。

機能としては、境内の雨水もしくは地下水を境外へ排水するための溝と考えられる。

年代については、SD01から時期を示す遺物が出土していないため、不明であるが、第2層に掘り込まれていることから、寛文度造営（1667年）以降に造られた溝であると考えられる。



写真220 拝殿南調査区 拝殿調査区（南から）



写真221 拝殿南調査区 SD01上面検出状況（南から）



写真222 拝殿南調査区 SD01半截状況（南から）



写真223 拝殿南調査区
SD01蓋石取り上げ後の状況（南から）



第133図 拝殿南調査区 2層上面平面図 (S=1/40)

SB01（第135図）

3層上面で検出した。

規模・方位

調査区西側において南北7m、東西4mの石列を確認した。

石列は南北・東西とも石の面をそろえて配置されている。上部は後の造成などにより削平されているが、側面に石を積む石積み基壇の基底部分であると考えられる。

石で囲まれた基壇内には、礎石を据え付ける穴SK01～SK03を確認した。

建物の南北軸について、検出されたSK01・02の中心点および南北の石列から方位座標軸に対して、反時計まわりに3°振れており、N-3°-Wとなる。

SK01（第135図）**規模・形態**

規模は、0.9m×0.9mの不整円形である。遺構保存のため、完掘しておらず、深さは不明。土坑の周間に縁が配されている。

覆土

青灰色土が堆積していた。出土遺物なし。

年代・性格

基壇にともなう土坑であり、礎石を据え付ける土坑であると考えられる。SK1～3とも土坑の大部分が後世の造成で削られており、土坑の基底部と考えられる。

SK02（第135図・写真227）**規模・形態**

規模は、0.85m×0.8mの不整円形である。遺構保存のため、完掘しておらず、深さは不明。土坑の周間に縁が配されている。

覆土

確認できる土層では、覆土は、2層に分かれ、上層に暗茶褐色土、下層に青灰色土が堆積していた。出土遺物なし。

年代・性格

基壇にともなう土坑であり、礎石を据え付け

る土坑であると考えられる。

SK03（第135図）**規模・形態**

規模は、1.20m×0.9mの不整梢円形である。遺構保存のため、完掘しておらず、深さは不明。

覆土

青灰色土が堆積していた。出土遺物なし。

年代・性格

基壇にともなう土坑であり、礎石を据え付ける土坑であると考えられる。

建物の性格

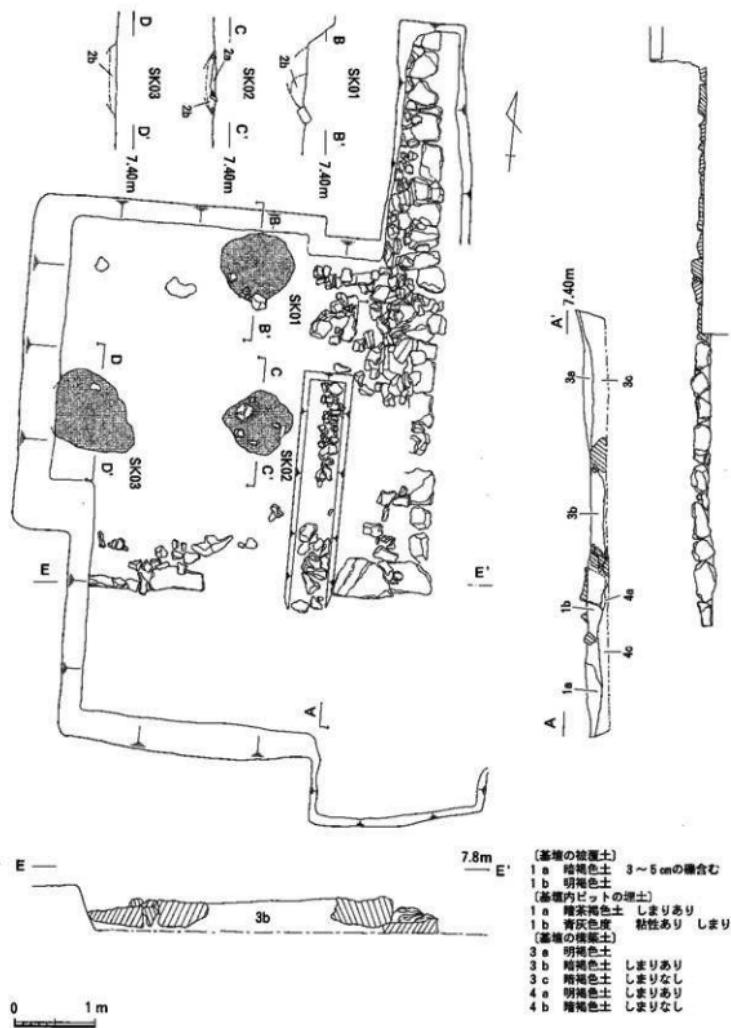
年代については、年代を特定できる遺物が出土していないため明らかにできないが、層序の関係から慶長度造営の建物である可能性がある。

基壇内で検出されたSK01～03は、およそ1間（6尺5寸）間隔で並んでいることから、『杵築大社只今御座候仮殿造御宮立間尺覚』（千家国造家蔵）にみえる「一、御供所（三間二六間）」、また『紙本著色杵築大社近郷絵図』にみえる御供所となる可能性が高い。（第134図）

平成12年度の八足門前調査時に、慶長度造営の本殿跡を検出しているが、今回確認したSB01とほぼ遺構主軸の方位がそろっている。



第134図 『紙本著色杵築大社近郷絵図』にみえる
御供所



第135図 拝殿南調査区 SB01造構平面図・土層図 (S=1/60)



写真224 拝殿南調査区 SB01石列検出状況（拡張前：南から）

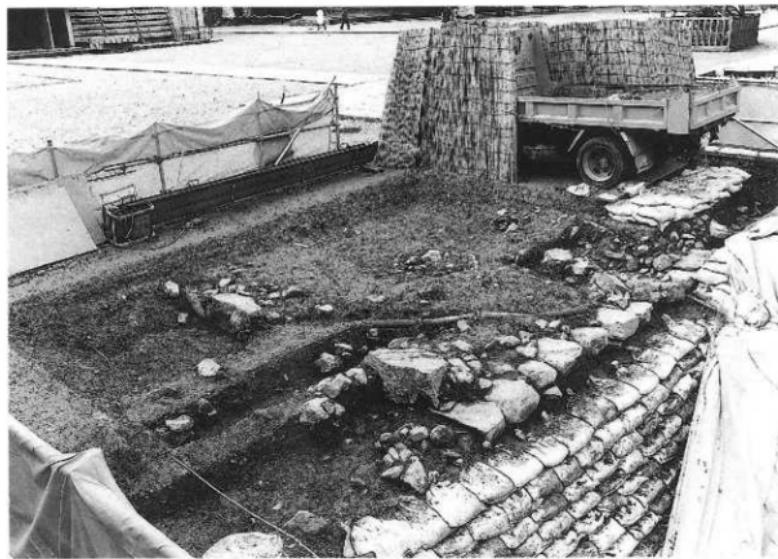


写真225 拝殿南調査区 SB01石列検出状況（拡張後：南東から）

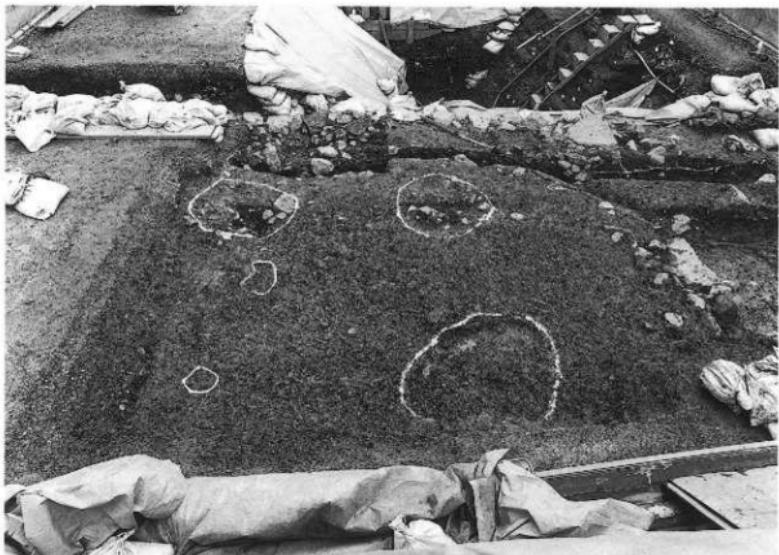


写真226 拝殿南調査区 SB01土坑検出状況（拡張後：西から）

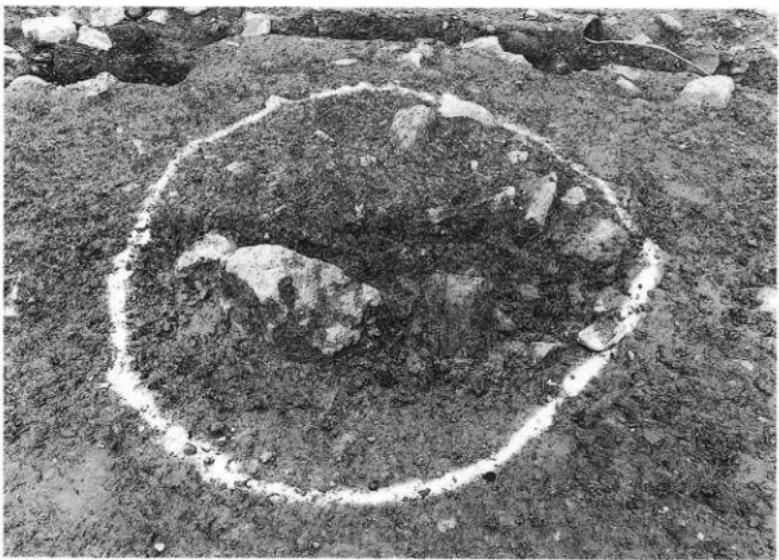
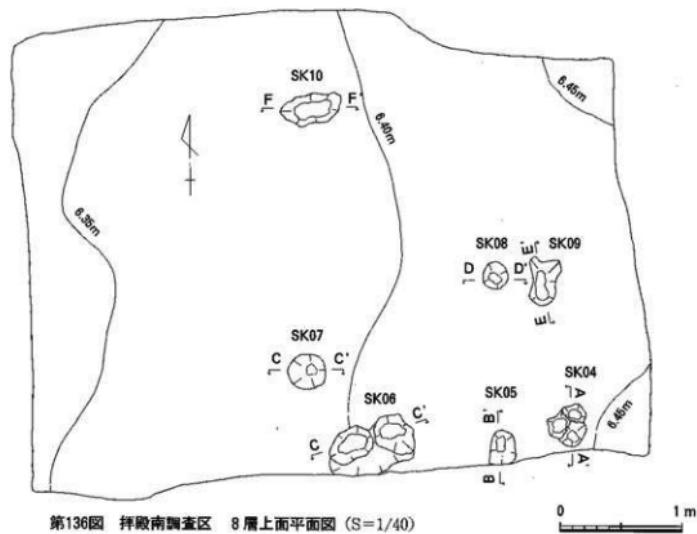
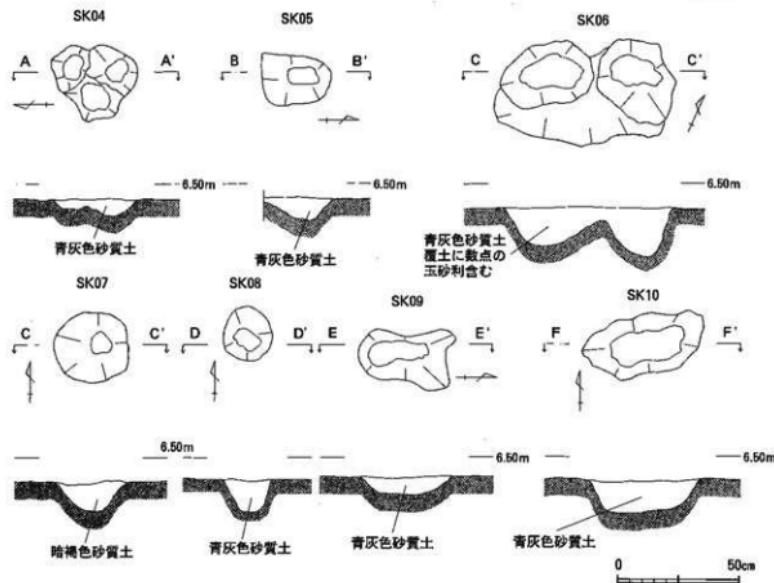


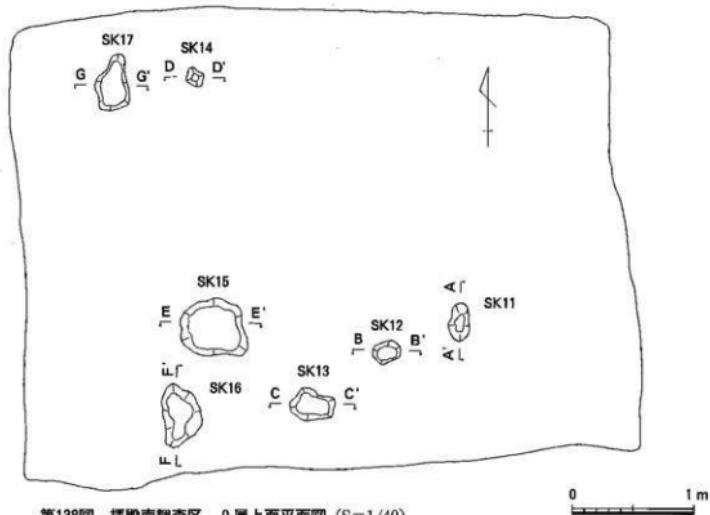
写真227 拝殿南調査区 SB01 SK02半裁状況（拡張後：西から）



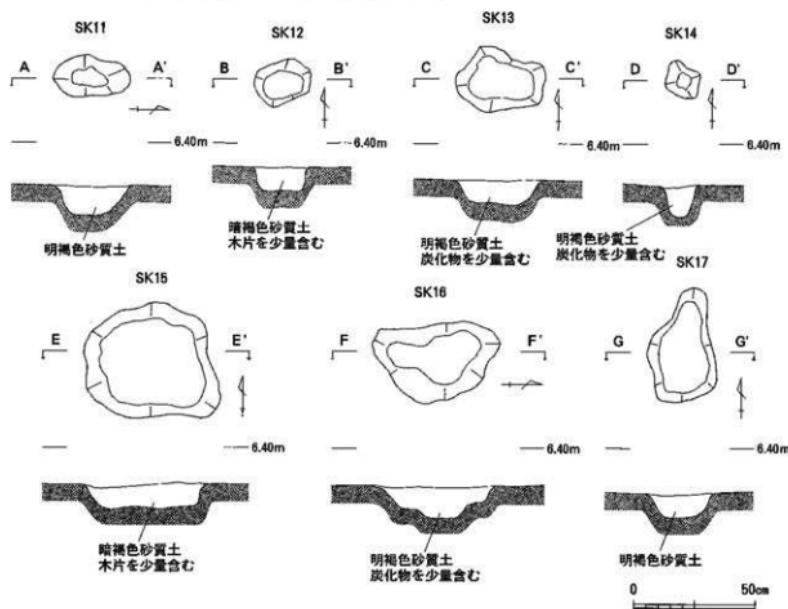
第136図 拝殿南調査区 8層上面平面図 (S=1/40)



第137図 拝殿南調査区 8層上面検出遺構平面図・土層図 (S=1/20)



第138図 拝殿南調査区 9層上面平面図 (S=1/40)



第139図 拝殿南調査区 9層上面検出遺構平面図・土層図 (S=1/20)

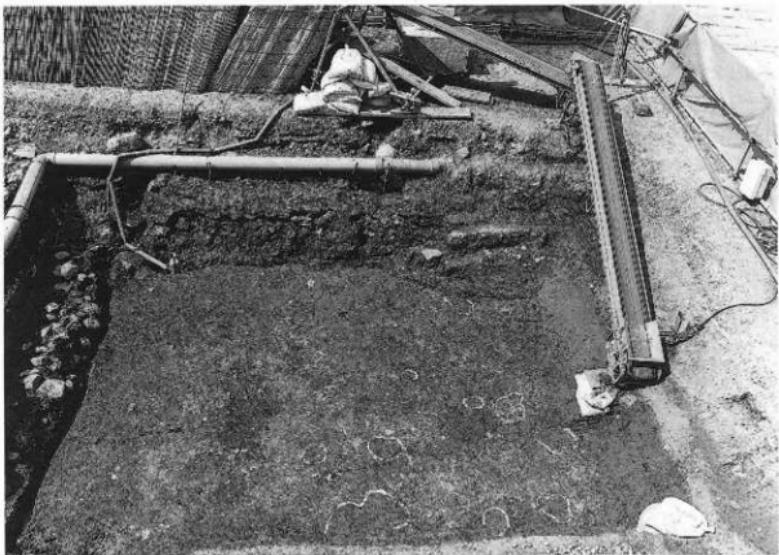


写真228 拝殿南調査区 8層上面検出状況（南から）



写真229 拝殿南調査区 9層上面検出状況（南から）

SD02 (第140図・写真230～231)

調査区を北東から南西に流れる流路を流路の規模は大半が調査区外であるため不明であるが、調査区内で確認できた規模は、東側で、上面検出幅180cm、底面80cm、深さ28cm。また西側で上面検出幅240cm、底面120cm深さ44cmを測る。

底面の標高差からみると、流路は北東→南西の方向に流れていたと考えられる。

SD02底面が南から北側に落ち込んでいることから、調査区南端では、流路の南岸が検出されたと考えられる。埋土は1cmから3cm程度の円磨された砂利であり、SD02は緩やかな水の流れによって形成されたものであると推測される。

流路の肩（水際）には、須恵器の長頸甕2点、壺身1点、横瓶1点が集中して出土する箇所があり、人為的におかれたもしくは捨てられたと考えられる。

出土遺物（第141～142図・写真233～236・表68～70）

1～12は、須恵器である。

1は、壺身である。口径は12cmであり、大谷編年A7型、高広編年II A期に該当する。

2～5は壺蓋である。2は、つまみが宝珠形であり、口縁内面にかえりが付くことから高広編年II B期、出雲国府編年第1形式（7c中～後）に該当する。3は、口縁部にかえりがないもの、4・5は輪状つまみをもつことから、高広編年IIIに該当する。

6は、高台付の壺である。底部高台内へラケツリあり、高広編年III A期。

7・8は、長頸甕である。7は、頸部が外反しており、大谷分類4型（出雲8期）、8は、長頸化し、口縁部が直行することから大谷分類3型（出雲6期・7C第2四半から3四半）に該当する。

9～11は、高壺である。9は、長脚高壺で、脚部に2段3方向に透かしを入れる。また、脚端にやや外傾するしっかりとした面をもつことから、大谷分類のA2 b型（出雲3期6C第4～末）になろう。10、11は、透かしが切れ目と

なっていることから、大谷分類のA4型（出雲編年3～4期・6世纪第4四半期～7世纪第1四半期に該当しよう。

12は、横瓶である。口縁端部に面をもち、体部外表面は、平行タタキ後、回転カキメ、内面は、同心円文オサエが施されており、高広編年III B期に該当しようか。

13は、土師器甕の口縁部。

14・15はいずれも上師器甕の口縁部で、口縁が「く」の字状に外反して開き、端部を丸くおさめる。古墳時代後半以降。

16～18は、土師器の高壺。

19は、手づくね土器である。内面にはケズリがみられ、外表面はハケ目がみられる。

20は、かまどの脚部である。

流路が機能した時期については、流路肩の須恵器が7世纪後半代と考えられ、また流路埋土上層には8世纪前半の壺蓋が含まれるため、流路が機能した時期は、7世纪後半代から8世纪前半と考えられる。



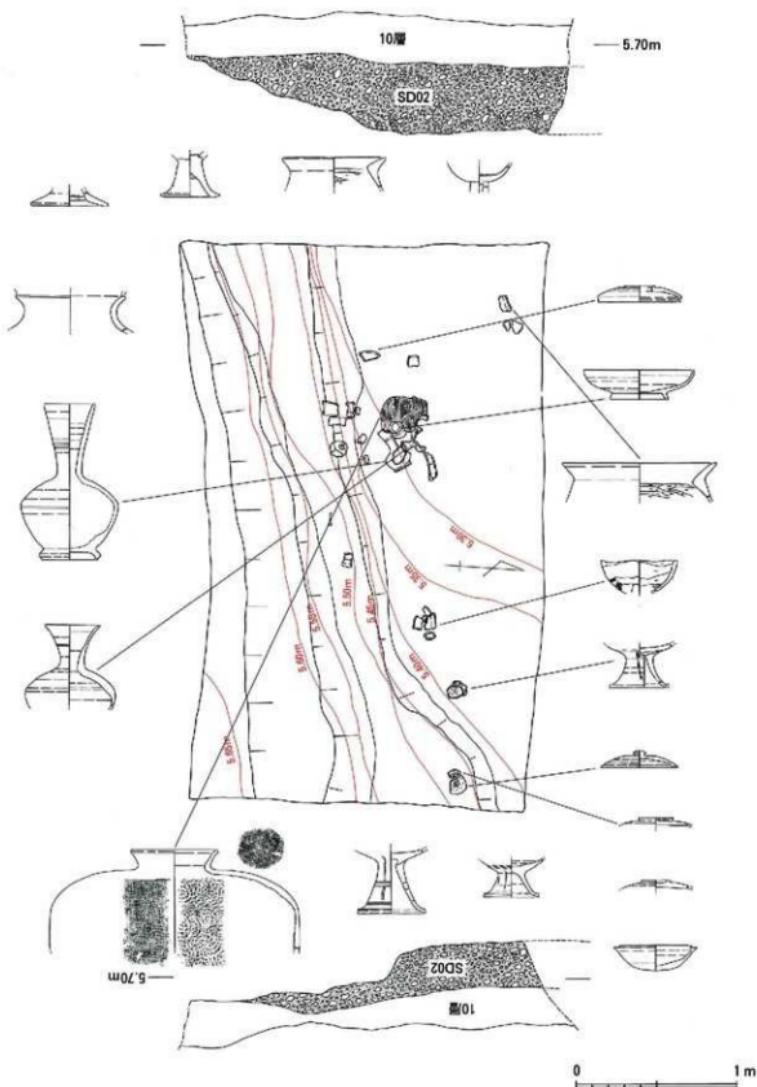
写真230 拝殿南調査区 SD02完掘状況
(南西から・土器は再配置)



写真231 拝殿南調査区 SD02完掘状況（南から・土器は再配置）



写真232 拝殿南調査区 SD02遺物出土状況（南から）



第140図 拝殿南調査区 SD02遺構平面図・土層図 (S=1/30)